

第15回「学長との懇談会」の開催結果について

1. 日 時 平成21年8月6日(木) 13:30~15:30
2. 場 所 神戸薬科大学 10号館 4階会議室
3. 出席者 (大学等) 市内25校の学長・校長(代理出席1人含む) 20人(欠席2人)
(神戸市) 矢田市長、梶本副市長、鶴崎副市長、石井副市長ほか
4. 意見交換
テーマ: 「新型インフルエンザ及び『行こう! 神戸』キャンペーンについて」
「神戸づくりの指針について」

<新型インフルエンザ及び『行こう! 神戸』キャンペーンについて>

(神戸市立工業高等専門学校)

- 新型インフルエンザの発症・拡散時期にも、一部のスポーツ大会が続行されている例があった。高校以下は教育委員会との連動で休止等の対応をしていると思うが、大学等については各種競技団体や体育協会、クラブ活動など大学組織の中だけで考えられないものだと思うので、行政の対応との連携も含めて今後の対応が課題であると感じた。
- 県と市が必ずしもスムーズに情報交換されていないところが散見された。
神戸市の中でも、全学生の健康状態を教育委員会に報告していたが、他部局から同じデータの提出を求められることがあった。現場としては大変な作業になるので、そのあたりも今後の課題として考えていただきたい。

(神戸芸術工科大学)

- 今回ほど日常の大学間の情報の連携が必要だということが感じられたことはなかった。学園都市を中心とした大学連携のUNITYのメンバー、事務局等と大変いい連携ができたと思っている。情報の速やかな開示や共有を行うためのネットワークが今後も必要であると感じた。また、このことと関連して、今回、休校に伴い時間割の変更や教員の調整などいろいろ調整に苦慮したが、学内のみならず学外の連携大学との調整なども考えると、私たちが頼りとする情報拠点があればいいと思う。

(兵庫医療大学)

- 今回は、霞ヶ関がすべて情報・対応をコントロールしすぎて、現場とのギャップが非常にあった。震災のときの教訓がどう生かされているのかというのは、恐らく皆さん感じられたと思う。ヘッドクォーターが、皆さん慎重にと言いながら、一方であれだけ過剰反応しており、日本では疫学に関する訓練ができていないと感じた。こういう時は、国との関係では、県と市が一体となって、地域としてももう少し意思決定できる体制を普段から構築しておく必要がある。
- 高校や中学とは事情が異なる面もあるので、大学を休校にする場合は今回のことをよく分析し、ある程度ガイドライン・マニュアルをつくって、あとは各自で判断するようにすればよい。基本線のガイドライン・マニュアルをぜひつくっていただきたい。
- マスコミの過剰反応等により風評被害などが出ている。マスコミ・ジャーナリズムの方は、もう少し知識を深め、実態を正確に伝えてほしい。
- マスコミ対応は個々ですると大変なので、こういう感染に関しては行政が一括してやっていただきたい。各施設に感染が出れば中央で全部情報を収集し、そこで公表をするという形にし、マスコミは現場には行かないという協定を結んでほしい。そのためには情報をいかに共有するかが大事になってくると思うので、情報の共有と、大学としてはどういう対応をしたらいいかという基準をつくっていただきたいと思う。

（神戸親和女子大学）

○学校内で何か起こった場合は休校などの対応がとれるが、入試などで高校生が来る場合について、どのように対応すればよいかアドバイスをいただきたい。センター入試は文科省がいろいろ指示するだろうが、個々の学校の入試については、たとえば入試の機会をもう少し増やすなどの対応が必要になると思う。

（甲南大学）

- 今回は弱毒性であるということがわかっているから落ち着いているように見えるが、弱毒性であれ、やはりこれから大量に蔓延する可能性を秘めているものではないか。
- 電車では乗客全員がマスクし、たまたまマスクを忘れた私が周りからじっと嫌な目で見つめられるなど嫌な経験をした。逆に今度は、私が東京に行ったら、まるで菌を背負ってきたような感じで接せられた。霞ヶ関の行政のトップやマスコミの過剰な反応については何とかしてもらえないかと痛切に感じた。
- 中央と地方自治体の関係性で言えば、今後、こういう危険性を伴うものに関しては、自治体の主体性で判断を大いにしていきたい。
- インフルエンザに限らず、学生の大麻や犯罪など、マスコミ対策が必要な場面が多く、健全な研究教育の場を守るうえで課題になる。この学長懇談会のように、大学間で情報交換を密接に行う必要がある。

【市長コメント】

- 本市では以前から鳥インフルエンザのH5N1に対応するための本部体制をとっていた中で、今回、海外渡航歴のない高校生が発症した。これは、医師会等の先生方の意識が非常に高く、詳細検査にまで至ったことで初めて発見出来たのだと思っている。日本の至るところでウイルスは蔓延していた中で、きちんと詳細検査を実施した結果、今回のような形で神戸が初だと言われたのではないかと感じている。
- 先日の新型インフルエンザへの対応について言えば、霞ヶ関はいわばH5N1タイプの警戒態勢を崩さなかった。私どもも集団感染の防止という観点から、最初はH5N1的な対応でやらざるを得なかったが、しばらくして季節性インフルエンザに近いということが分かった。第1学区をはじめ、第2・第3学区の休校措置をとったが、詳細検査の結果、感染者ゼロの状態が2日間あったため、学校ははじめ各施設を再開したい旨を厚労省に伝えたとこ、神戸は神戸独自のスタイルでやってくださいと言われた。
中央市民病院はすでにパンク状態だったので、一般医療機関に診療をお任せするしかないという判断をし、医師会にも協力いただく状態になっていた。また、神戸の検疫所長も、これは通常の季節性インフルエンザに近いものだから大層な対応は必要ないと主張してくれた。霞ヶ関はそういうことは一切想定しておらず、神戸の対応は非常に先見例として大臣は評価され、神戸市長が決められるんだったら、それですべてやっていただいたら結構ですと言っていたいき、休学及び休校もすべて取りやめとなった。今回、神戸市の医師会及び行政の検疫機関は非常に正しい判断をしたと思っている。
- 現在、「新型インフルエンザ対策神戸モデル——早期探知地域連携システム——」を考えている。早期探知というのは、医師会、歯科医師会、施設、薬剤師会、学校、保育所などをベースにしてあらゆるところに網を張っておいて、もし事例が発見されればすぐに保健所に集約しようというものである。そして、地域での患者発生状況の探知等については、保健師による仲立ちを考えており、第2派に備えてネットワークを張り、異常が発見されればすぐに保健所に意見を集約し、医師会をはじめ各関係機関が一体になって対応しようという危機管理体制をとろうとしている。今、こういうネットワークは他都市にはないが、神戸市は神戸独自のスタイルとして早期探知システムを組み上げて、初動を早くすることが非常に大事であると感じている。
- 国に対して今後、風評被害などを起こさないよう、外国での奨励などの情報開示をきちんとやっていただきたいと思っている。
- 自治体は自治体に任せて独自で判断するというふうにさせていただければ、我々のような大都市はいわばフル装備の機能を持っているので、十分対応できると思っている。今後、第2波は間違いな

く来るし、これに対する警戒を緩めることはあってはならない。そういう事態が集団的に起こらないようにしていくためのシステムを組むので、その中に先生方もお入りいただいてやっていくことができればいいのではないかと考えている。

<次期総合基本計画「神戸づくりの指針」について>

(神戸学院大学)

- 基本的考え方の中で、知の集積、人材育成、地域づくりや、人・物・情報の交流・融合、ポートアイランドの活性化といったようなことも挙げられており、大学がこれからも神戸市にいろいろな面で協力していけるのではないかとこのように考えている。
- 本学を初め、多くの大学がポートアイランドにいろいろキャンパスをつくっている。学生の数が増え、学生の生活環境の充実・改善が非常に大事であると感じる。一つ具体的に言うと、学生をいかに三宮からポートアイランドに輸送するか、あるいは、神戸の大学に来る学生の中には地方から来て下宿する学生もいるので、生活環境の一つとしてワンルームマンションなども積極的に整備していただきたいと思っている。何年もすれば、すばらしい学びのまちになっていくのではないかと。私の経験から言うと、本学が西区の有瀬に出来た時には畑の中にぽつんと建っていたが、今は整備が進み非常にしっかりとしたまちになってきている。ポートアイランドも時間がかかるかもしれないが、スピードを上げて学生のまちづくりを考えていただきたい。

(神戸大学)

- 本学もポートアイランドに先端融合研究の拠点を置くと8月4日に記者発表したが、大学の魅力をいかに高めるかということと、神戸大学をどういうふうな大学にしていくべきかといったような枠組みの中で考えた構想である。神戸大学は様々な学術分野の中に活躍されておられる方がおり、それをまとめて一つのベクトルに乗せて、こういう教育・研究分野を発展させていくんだということを明確に打ち出し、ポートアイランドに拠点を置くことにした。今の六甲台のキャンパスはあまりスペースもないし、今のキャンパス内ではどうしても今までの延長線上の建物になってしまう。このエリアの特徴を活かし、我々の目指す拠点一産官学の連携拠点、先端融合の研究をする拠点として、国際的な連携拠点をつくらうと長年検討してきて、やっと我々の構想を打ち出せる時期になったわけで、うまく研究成果を出して多くの方が集まり、ポートアイランドが活性化されるといったようなことができればと考えている。

(神戸芸術工科大学)

- 私たち大学は、社会に出る人材をいかに育成するかが大きな課題であるが、近年の就学・就職状況を見ると、ただ大学を卒業させれば社会に役に立つ人材が育つという訳ではなくなったと思っている。大学卒業後も、いかに大学が卒業者を支援できるか、卒業後の新しい学習のチャンスをいかに提供できるかということが大きな課題だと思う。そのためには、やはり神戸でしか学ぶことができないとか、神戸でしか技術をつけることができないとか、世界のトップクラスのテーマを各大学で一つ、二つ生み出して、それを大いにアピールしていく必要がある。大学から神戸という地域社会に出て、私たちがどのような受け皿を地域社会と一緒に作り、そこに卒業生へのチャンスを与えていくかが課題だろうと思う。
- 今、「アニメ」というのは、日本が世界のリーダーシップをとっている。本学では神戸市の支援も受け、アニメの原画マンを養成するために全国に声をかけ、大学を卒業された方、プロとして働いていらっしゃる方をもう一度集め、その能力をさらにスキルアップさせる仕掛けを準備している。こうした取り組みが、新長田など神戸の中でまちづくりを展開されているところにうまく定着し、そこで日本だけではなくアジアからのアニメの制作者を養成できないか。これはデザインの大学としての拠点だが、世界にこれしかないとか、これが私たち神戸ではトップだというもの一つ、二つと積み上げていく発信が必要ではないかと考えている。大学として、こうした拠点をつくることで活力、魅力を世界に発信することは大きな課題であると思う。

（神戸親和女子大学）

- 「神戸を支える『人財』」ということで、昨年1月に、神戸市の補助をもらって子育ての支援のセンターをつくったが、この8月に親子の参加者が1万人を突破し、学生のボランティアも1,000人を超えた。学外の社会のオフキャンパス教育と、学内のオンキャンパス教育とを融合させて学生を成長させたいと思っている。地域社会の中で学生が頑張りながら、神戸を支える人財になってくれればと思う。
- 学生がまちの中で、楽しく様々な分野で活動しながら自分を成長させ、最終的には自分の希望する職についてくれたらいいと考えているが、今は大学として非常にいい方向に向かって学生が成長しているのではないかと感じている。いろいろな形で神戸市に支えてもらいながら、神戸市の中の大学として、もっといろんな形で連携をとりたいと思っている。

（神戸市看護大学）

- 本学は規模が小さい大学で、その中で例えば短期留学の時に、一つの大学だけでは人数が少なかったり、旅費の問題等がある。各大学によって専門が違うので難しい部分もあると思うが、神戸市には多くの大学があるので、少し広い視野を持って幾つかの大学がジョイント的な形で短期留学などができるかと思っている。

（神戸市立工業高等専門学校）

- 今日大まかな方針をお聞かせいただいて、ほぼ網羅できていると感じているが、近畿圏の広域地方形成計画の中で私が提案申し上げていたのが、ベイエリアに環境・エネルギー産業が集積し、低炭素社会を先導するとともに自然環境も豊かな地域をつくる「グリーンベイ構想」である。これは、新しく今のパネルベイというものを基本にしながら、近畿圏がグリーン化に向かって、次の産業の推進力にしていこうというものである。そうすると、都市のインフラやアメニティ施設も、やはりグリーン化に向けた戦略が都市の基本計画の中で必要になってくると思う。これは「地球環境問題」という文言の中で全部含まれていると思うが、個別にはグリーン化を進めるための戦略と戦術が具体化されなければいけないだろうと感じる。
- 神戸市は傾斜土地であり、5キロも海岸から離れると山の上で車がないと生活ができない。どんどんお年寄りの方が山の上のマンションを売り払って駅の近くに移り、山の方は空洞化が進んでいる。山の方でも生活できるように、しかもグリーン戦略ということを考えていこうとすると、神戸市が思い切って、運転免許の要らないゴルフ場のゴーカートのようなもので、山の上も走れるようなものを、定期的に周回させることを一つの戦略として考えていこうということを大きく打ち出しておく必要があるのではないかと。
- 「地域」という言葉が、神戸市の区単位での地域になっている。近畿圏全体での「神戸地域」という意味で「シティー・リージョン」から、さらにもう少し広げて「グローバル・シティー・リージョン」として、神戸が他の都市と何を連携するのも考えていく必要がある。例えば次世代スーパーコンピュータと西播磨のSpring-8との連携の仕方はどうするのか。連携を具体化するための組織等がないとなかなか動かないので、ソフトマネジメント、あるいは、それを運用する組織が必要になってくると感じている。
- ポートアイランドに大学が進出してきてきれいになったが、例えば業務ビルやマンション、大学等しかなく、とても寂しい。例えば飲み屋など、人が生活するまち・地域の中で学問するというのがよく、隔離された場所ではなかなか学問は進まないし、エネルギーも出てこないのではないかとこの感覚を持っている。新しいまちづくりのコンセプトとして、もう少し生活できる機能を導入する方策を考えていく必要があるのではないかと。交通も不便であるので現在は本土から離れた島のようになっているが、三宮と連続できるような町並みが必要で、特に大学周辺の町並みづくりをもう少し別の視点でお考えいただきたいと思う。
- 若者の地元就職ということ考えた場合、神戸市には中小企業が圧倒的に多い。それらの中にはオンリーワン企業が非常に多く、それらが今どんどん成長しているし、海外へも進出している。その方々に聞くと産学連携といっても、工場です仕事をしながら「これはどうしたらいいんだろうか」といった時に即座に回答が返ってくるシステムが本当の産学連携であり、研究発表や懇親会もいいが、

もう少しタイムリーに相談できるシステムをつくってほしいと言われた。産学連携の一環として、こうした質問にインターネットで即座に回答できるシステムをつくっていったらどうか。もっとITを活用して産学連携を進めれば、産業を活性化する方法が出てくると思うし、知的財産も活用できる。そういう仕組みも少し考えていただきたい。

【市長コメント】

- これからの時代、「人財の育成」ということはかなり重要な視点であると思っており、その環境をどう整えていくかということも大変重要なテーマであると思っている。例えば、ポートアイランドについても、2期の発展に伴って1期の整備を考えていく必要があるのではないかと感じている。元のまちに戻すのではなく、新たなまちづくりを展開できるようなデザインを考えてみてはどうかという検討を始めようとしている。
先ほど、生活機能的なものが要するというお話もいただいたが、今後さらに大学が集結していただいた場合を考えて、まちをどのように考えていけばよいか考える必要がある。また、学生の皆さんがこの地域に居住していただく際に、適正な場が要るのではないかとと思う。例えば、学園都市から少し離れているが、垂水警察の近くに学生マンションをつくったら学園都市の学生がすぐに入っていたという事例もあるので、大学連携の中でこうした需要の点検をしながら、施設をつくっていくということも一つの方法ではないか。
- 大学間のジョイントのお話があったが、やはりこれは重要なご指摘ではないかと思っている。経費の要ることではあるが、連携していただく中でそういうことが可能になるような方策を今後内容を詰めて実行してみてはどうかと感じた。
- ポートアイランド地域については、進出をお決めいただいた兵庫県立大学や神戸大学等の大学進出が契機となって、全国の大学が研究に来ていただけるようになった際には、それを受ける素地について考えていく必要があると考えている。これについては、近隣の企業等からも要望をいただいているし、女性の研究者の方々のための子育て支援など、いろいろな課題がある。人材が集まっていたりするような素地について、長期的な視野のもとで計画の中に位置づけていくということが重要ではないかと思っている。
- デザイン都市の推進に関連して、旧生糸検査所を神戸市が取得した。使い方によって価値が相当高まるのではないかと感じている。この旧生糸検査所の機能を少し多機能に考え、ベンチャー活動の場や、アニメ・映像の拠点をつくってみるということも一つの方策ではないかと感じているので、これからの整備の中でまたご検討をいただければと思っている。
- たくさんご意見をいただく中で、これからの戦略としてやっていかなければいけないもの、すぐに取りかからなければいけないものなど、さまざまお話をいただいたので、区分けしながら進めさせていただきたい。

※次回は神戸女子大学にて開催予定。